

国語

氏名	
----	--

受験上の注意

1. 試験時間は、50分間です。
2. 答えを書き始める前に、問題用紙には氏名を、解答用紙には座席番号・受験番号・氏名を書いてください。
3. 字数制限のある問いでは、句読点や符号（ 、 。 「 」 など）も1字と数えます。
4. 印刷が読みにくかったり、解答用紙が破れたりした場合は、静かに手を上げて、試験監督の先生に知らせてください。
5. 気分が悪くなったときは、静かに手を上げて、試験監督の先生に知らせてください。
6. 問題を解き終わっても、途中退室はできません。

一、次の各問いに答えなさい。

問一 次の――部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① センモンカの意見をうかがう。
- ② 別の公園に桜をイシヨクする。
- ③ 大学のコウギを聞く。
- ④ カンショウ的な涙を流す。
- ⑤ 確かなシヨウコを得たい。
- ⑥ 異様な雰囲気をサツチする。
- ⑦ 失敗をイサギヨク認める。
- ⑧ 照明をタクみに利用する。

問二 次の慣用句・ことわざを含む文について、☐に当てはまる漢字を答えなさい。

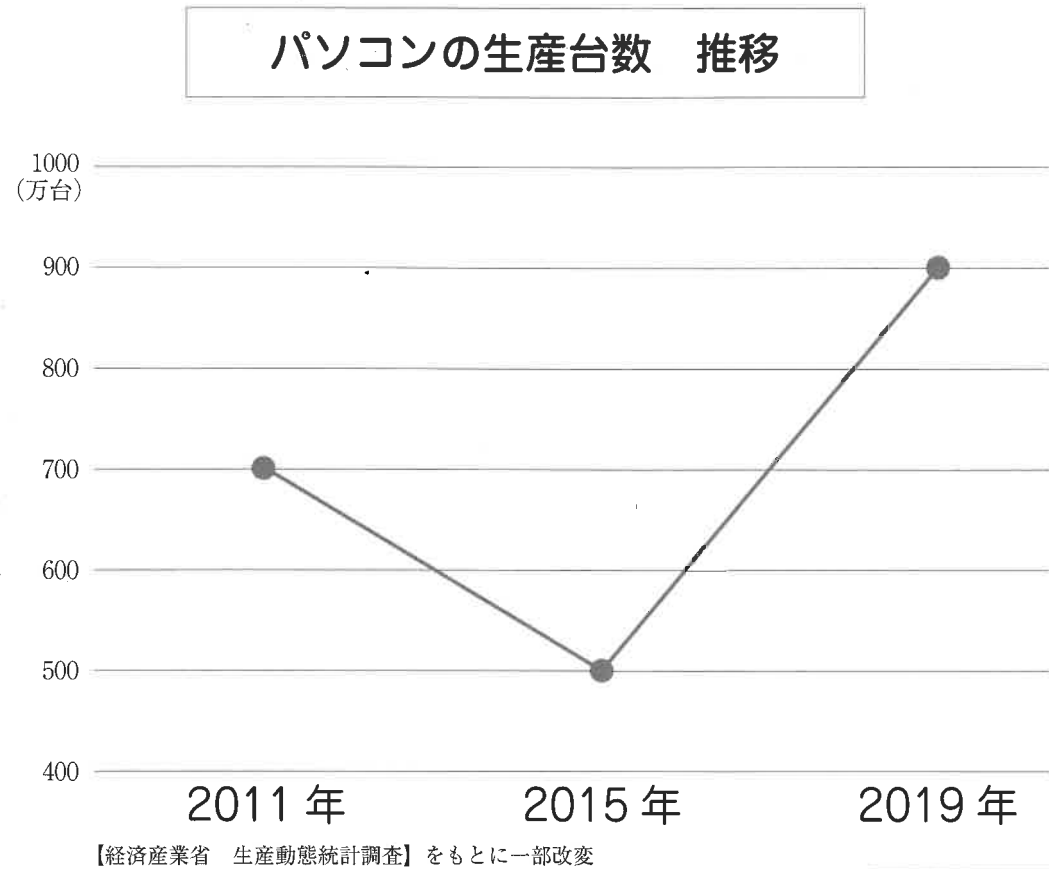
- ① 彼はいつも元気なのに、今日は先生に叱られ、☐ ☐ (二字)に塩の状態だ。
- ② 試験まで残り一ヶ月となり、この夏は☐ ☐ (二字)の陣の覚悟で勉強に取り組む。

問三 次の各文の――部が直接かかる部分を以下の例のようにぬき出しなさい。ただし、句読点は含みません。

(例) 雨が降ったので、洗濯物がぬれた。 解答 降ったので

- ① たとえ 日々の学習が つらくても 学校を嫌いになる ことは なかった。
- ② 突然 遠足が 中止になると 聞き、悲しさで 口も きけなくなつた。

問四 次のグラフ中のパソコンの生産台数の変化に着目し、そこから読み取れることを一つあげ、四十字程度で書きなさい。その際、(注意事項)の1・2にしたがうこと。



- (注意事項) 1 文の主語を明らかにすること。
2 数字を表記する際、次の例を参考にする。
(例 八〇〇万台 八百万台 二〇一三年)

二、次の文章(【本文】)を読んで、後の問いに答えなさい。

【本文】

① 環境に対する人々の関心は、たとえばロンドンの環境悪化がイギリスの自然を考えるきっかけになっていったように、都市の環境への関心を出発点にして、次第に自然環境全般へと広がっていく傾向をもっている。それは、日本の戦後の歴史をみても同様であった。

② 戦後の日本における環境問題をめぐる議論は、**A** に対する批判からはじまった。それは、古くは江戸時代後期からの鉱毒問題以来の課題でもあったが、一九五〇年代後半には水俣病が社会問題化し、高度成長が軌道にのりはじめると、工場から出される排煙、廃水が各地の人々の健康を蝕むようになっていた。

③ 六〇年代に入ると、**B** の環境悪化も顕在化しはじめる。大気汚染、河川・海洋汚染が都市とその周辺ですすみ、都市環境の改善が課題にのぼるようになる。

④ さらに七〇年代になると、大規模な開発による自然の荒廃が問題になりだし、ここから自然保護というテーマが提起されてくる。人々は次第に自然と人間の共生について議論するようになり、現代における自然と人間の関係全体を考えなおそうという気運が、社会のなかに広がってきた。

⑤ 簡単に述べれば、日本の環境問題をめぐる議論はこのようにすすんできたが、この過程では注目すべきいくつかの変化も生まれていた。最初に、企業の出す公害が問題になったときは、人々の批判は、このような結果を生みだした企業とそれを見逃してきた行政の怠慢に向かっていた。つまり、被害者としての市民、加害者としての企業、行政という図式がここにはあったのである。

⑥ もちろん、このような構図が今日なくなったわけではない。だが、都市公害が問題にされはじめたころから、^①このような図式だけでは解決できない問題もまたあることに、人々は気づくようになる。

⑦ 都市公害の蔓延を招いた責任の大きな部分が、企業とそれを黙認してきた行政にあったことに変わりはない。しかし、その責任の一端が市民自身にもあることを、人々は認めざるをえなかったのである。家庭から出る排水も、自家用車が出す排気ガスも、公害の発生源のひとつであった。ここから、被害者にして加害者でもある市民としての私たち、が意識されるようになる。この意識を媒介にして、合成洗

剤の使用をやめようという運動や、自家用車の利用を減らそうとする動きが生まれてくる。

- ⑧ ところが問題はそう簡単ではなかったのである。なぜなら私たちの暮らしや、市場経済での利益をめざす活動自体が、良い環境をつくることに對して対立的な面を持つていることに、たちまち私たちは気づかざるをえなかったからである。

- ⑨ 高度成長がはじまった一九五〇年代の後半には、「大量生産、大量消費」という言葉とともに、「消費は美德」「浪費は美德」という言葉が、社会的な標語と化していた。そして実際、企業は大量生産、大量流通、大量消費を推進し、この動きに加わることによって、人々もまた所得をふやしてきた。その所得が暮らしを拡大しつづけた。そしてそのこと自体が、資源やエネルギーの大量消費を生み、公害発生^{きばん}の基盤^{きばん}になっていった。こうして人々は、公害を発生させていくシステムのただ中にいる市民としての私、を感じざるをえなかったのである。

- ⑩ とすると、そのような市民としての私たちはどうすればよいのか。七〇年代に入ると、大量消費、便利さ、効率といったものを考えなおそうという気運が生まれ、農作物を農民から直接購入^{じきつぽう}する、いわゆる産直の動きも生まれてくる。

- ⑪ といっても、それですべてが解決するはずはなかった。このジレンマを、つづいて問題になった自然環境をめぐる動きが深めていった。

- ⑫ 自然の荒廃が問題にはじめたときも、最初、人々の意識は、大規模な開発とそれに伴^{ともな}って生じた自然の減少にあった。いわばそれは、自然の大切さを顧みない企業と行政に対する批判であった。

- ⑬ ある意味では、ここでは市民は気楽な批判者でいることができた。なぜなら自己の加害者性をあまり意識することなく、自然を守れと人々は主張することができたのだから。ところが、ここでも、次第にそれではすまなくなる。というのは自然の問題に深入りしていくと、たちまち私たちは自然と人間の間にある微妙な関係に気づくからである。

- ⑭ たとえばカタクリの花は、以前は春先になると、いろいろなところで咲いていた花である。ところがいまでは、関東地方などでは天然記念物にしてもよいほどに少なくなっている。その理由は、開発にあったというよりも、暮らしのなかで薪や炭が使われなくなつて、里山の伐採や利用がおこなわれなくなったことにある。

- ⑮ 人家近くの里山は、かつては村人が日常的に利用する森として位置づけられていた。村人はここから薪を切り出し、草を刈^かつて牛馬の餌や肥料にし、落ち葉も集めて畑に入れた。こうした行為は、一面では元からある自然をこわしていく行為であるが、そのことによって明^あい里山がつくられ、草花や小動物が数多く暮らす場所になっていたのである。村人の里山利用が、生物種の多様性をつくりだしていたといっ

てもよい。

- ⑯ 日本の自然には、多かれ少なかれ、このような面がある。つまり、自然と人間はつねに敵対的であつたわけではなく、人間による自然の利用が自然の生命力を高める、というケースがいくらかもあつたのである。ところが今日おこなわれている自然の改造は、自然を傷めるばかりである。とすると、この違いはどこから来ているのか。

- ⑰ その理由は、その地域がつくりだしてきた伝統的な方法にしたがつて自然に働きかけているのか、それともそれを顧みることなく、近代技術によって自然を改造しているのかという点にある。

- ⑱ 農山村や漁村に暮らす人々は、以前からその地域の自然を利用しながら暮らししてきた。森は木材や薪を切り出すところでもあり、山菜採りや茸狩りをする場所でもあり、ときに猟場でもあつた。草刈り場や落ち葉を集める場所として利用されることもあつた。同じように川や海は、漁場や流通路として使われ、その川には度重なる改修が古代から加えられている。

- ⑲ その長い歴史のなかで、人々はその地域にもっとも適した自然の改造の仕方や、利用の方法を身につけてきたのである。ここからつくられたのが、自然を利用し、ときに改造までしながら、自然を上手に維持していく技と知恵であつた。来年以降も絶えることがないように山菜や茸を採り、一本の木を切るときでも地形を考え、その木の最終的な利用方法の違いによって用いる伐倒の方法を変える。そんなことは伝統的な村の暮らしでは当たり前のことであり、それがその地域の自然の維持にはたした役割は大きかつた。

- ⑳ その地域に暮らす人々にとっては、自然と人間の関係は観念的なものではないのである。この関係を司っているものが、その地域がつくりだしてきた人間の技と知恵であり、その技と知恵を媒介にして、自然と人間の間には、無事な関係が維持されてきた。

- ㉑ このような事実が気がついてみると、私たちはいくつかのことを考えなくてはならなくなる。そのひとつは、自然保護の主体は、基本的に地域主権的なものなのではないかということであつた。考えてみれば、世界には共通する自然など存在しないし、日本にも日本という共通の自然は存在しない。自然はそれぞれの地域ごとにさまざまであり、そのさまざまな自然が互いに関係を結びながら、全体の自然が展開しているのである。とすれば、そのさまざまな自然に適した自然と人間の関係を創造することが自然保護の出発点であり、そうである以上、自然を守る主体は、地域主権を軸にして形成されなければならないはずなのである。

- ㉒ 第二に考えなければならないことは、人間が自然を利用しながらも守る方法は、その地域の人々がもっている技と知恵のなかにあるとい

うことであろう。つまりそれは知識でもないし、単なるシステムでもない。人間の精神がそのまま身体の動きとなって現れてくるような、村人にとってはどうということのない技、しかしその技をもっていない人間にとっては驚嘆すべき技、それが自然と人間の関係を司る上でいかに大事かということである。

23 それに、もうひとつ考えなければならないことがある。それは自然と人間が無事な関係を維持していくには、歴史の継承、あるいは伝統の継承という課題がある、ということであった。知恵や技は、その地域が生みだした伝統として継承されてきたものである。そして、それを継承していかないと、自然と人間の関係は無事でありつづけられない。

24 このようなことが分かってきたとき、人々は戸惑いを覚えた。なぜなら、それらは近代社会の価値観とは異なるものだったからである。近代社会では、地域的な考え方、つまりローカルな考え方よりも、広い地域で通用する普遍的な考え方のほうが価値があるとされてきた。知恵や技よりも、知識や技術のほうが大事にされた。そして歴史の継承よりも歴史の発達を重要視してきた。ところが、このような近代的価値基準のいずれもが、自然に対しては対立的だったのである。とすれば、^⑦近代的価値基準を基礎にしてつくられた社会や経済のなかにいる私たちは、どうすればよいのだろうか。

(内山 節「私たちは何処に行こうとしているのか」による)

問一 A・B に当てはまることばを、 A は七字で、 B は二字で、【本文】中からぬき出して答えなさい。

問二 部①「このような図式だけでは解決できない」とありますが、その理由として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 五〇年代の日本では、工場から出る有害な排煙や廃水は、それを出してきた企業だけの問題ではなく、それを見逃してきた行政にも責任があることが分かってきたから。

イ 戦争が終わり、五〇年代に都市公害が問題になったことで、自然環境を悪化させたのは、企業や行政ではなく、むしろ都市部に住む市民であったということが明らかになったから。

ウ 戦後から五〇年代の環境問題は、市民を被害者として考えていたが、大気汚染、河川・海洋汚染が進んだことで、その責任が市民自身にもあることが分かってきたから。

エ 五〇年代から六〇年代になると、企業が大規模な開発を行ったため、自然が荒廃していったので、その根本原因である経済活動のあり方を考えなくてはいけなくなったから。

問三 — 部②「私たちの暮らしや、市場経済での利益をめざす活動自体が、良い環境をつくることに対して対立的な面を持っている」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア すでに人々は便利なものに囲まれて生活をしている。だが、高度な経済活動は、現在よりもさらに便利なものを生み出していくため「大量生産、大量消費」はますます加速していつているということ。
- イ 「大量生産、大量消費」をともなう経済活動は人々の所得を増加させ、その暮らしを向上させてきた。しかし、暮らしの向上は新たな資源消費をもたらし、また、公害を発生させる可能性を持っているということ。
- ウ 高度成長期において「大量生産、大量消費」はすでに美徳となっていた。そのため一部の人間が環境改善を訴えたとしても、多くの人間は環境を破壊するほどの「生産」「消費」を続けるだろうということ。
- エ 私たち人間は暮らしの中で、便利だが有害なものを使用している。工場では、人間の暮らしで発生する有害なものよりもはるかに大量の排煙や廃水を出すので、私たちが有害物質を含む製品の使用を減らしても意味がないということ。

問四 — 部③「このジレンマ」について説明した文の□に当てはまることばを、それぞれ【本文】中からぬき出しなさい。

- 七〇年代になり、人々は環境が悪化する中、□□□□(四字)という活動について前向きに考え始めるようになった。その一方で結果的に新たな□□(二字)などの問題を生み出してしまふと分かっているながら、一度□□(二字)させた暮らしを手放すことができず、環境の悪化を止められないということ。

問五 — 部④「村人の里山利用」とありますが、「里山利用」が自然にもたらした利点をまとめた次の文の□に当てはまることばを、それぞれ【本文】中からぬき出しなさい。

- 里山の自然を利用するにあたり村人は、その地域がつくりだしてきた□□□□(三字)な方法で、また、その地域にもっとも□□□□(三字)方法で自然に働きかけていく。それによって、自然の中に存在する生物の種類に□□□□(三字)が生まれ、自然全体の□□□□(三字)を高めていく。

問六 — 部⑤「自然保護の主体は、基本的に地域主権的なものではないか」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 自然と人間の関係は決して観念的なものではなく、地域の人間たちが地道に培ってきた実践的なものである。だから自然保護は、地域に特化した具体的な行いである必要があるから。
- イ 自然を守るのに簡単で効果的な方法はまだ開発されていない。そのため未来に目を向けて、地域の人々だけに苦勞を押し付けず、誰でも貢献できる自然保護のシステム構築が大事だから。
- ウ 自然保護には決まった知識やシステムが存在しない。そのため世界の様々な自然環境での保護活動の例から、自分たちの地域に合うような活動を選び、持続させやすい形式で行うべきだから。
- エ 全体としての自然は個々の地域それぞれの自然が相互に関わることで展開している。自然保護とは、様々な自然に適した、自然と人間の関係を創造することから始まるものであるから。

問七——部⑥「地域の人々がつけている技と知恵」の例として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 昔から農民は、その年の温度、湿度を読み取つて、畑に用いる肥料や、与える水の量を変えることで收穫量を増やしている。

イ 近年の猟師は、メスの個体や幼い動物を獲らないことで、森の中の動物が極端に減りすぎないように意識をして猟をしている。

ウ 漁業に従事する人は、風の向きや波の高さに合わせて、船に積み込む探查機を変えることでできるだけ多くの魚を釣り上げる。

エ 現代のきこりは、朽ちた木を切りたおすとき、他の健康な木を傷つけぬよう計測器を用いて木の倒れる方向を定めている。

問八 **【本文】** は――部⑦「近代的価値基準を基礎にしてつくられた社会や経済のなかにいる私たちは、どうすればよいのだろうか」という問いの投げかけで終わっています。次に示す**【参考】**を読んで、後のi〜iiiの問いに答えなさい。

【参考】

私たちは、かけがえのない人間という言葉の意味と、特別な人間という言葉の意味を混同させたのである。誰もが自分を特別な人間としてつくりだそうとした。ところがそんな努力が虚しくなってみると、私たちは、自分もまた特別な人間を目指した普通の人間、つまり二十世紀的な精神の習慣にとらわれた普通の人間にすぎなかったことに気づくようになる。

そう感じたとき、人々は二十世紀的な精神の習慣から脱出したいと思うようになった。そんな精神にとらわれることなく生きていく人間でありたいと思うようになったのである。しかし、そういう人間のあり方をつかみとることができない。すなわち、当たり前に生きて、当たり前に死を迎える人間の存在感をつかむことができないのである。

i
【参考】と【本文】を読み合わせて、大宮開成中学校の先生と生徒が話し合いました。話し合いの
それぞれ【参考】中からぬき出さない。

先生

「【参考】には、【本文】の——部⑦で投げられた問いについて、筆者の考えが書かれていますので読み取ってみましょう。」

大場さん 「まず、――部⑦の『近代的価値基準』とは何かを明らかにしよう。『近代的価値基準』は、【参考】を読むと

「ア
□
□
□
□
□
□
□
□」

(八字) をもとにした価値観』ということに整理できるね。」

宮沢さん

「ということは、☐イ☐☐☐☐☐（五字）であるのに、特別な人間であることを目指してしまった考え方のことだね。」

開藤さん 「それなら、結局人々は

	ア
(八字)	

を捨てたくなつたということが【参考】に書かれて

いるから、筆者は――部⑦の答えとして

☐ イ ☐ ☐ ☐ ☐

(五字) でいることがよい、ということを訴えているんだね。」

ii 「i」の話し合いの後、大場さんは【参考】の||部「当たり前に生きて、当たり前前に死を迎える人間」を次のようにまとめた。次の文の を、【本文】24段落の中の語句を用いて、四十字以内でうめなさい。

ことで、ごく自然に生命の充足を感じることでできる人間。

- 11 -

iii 「i・ii」のあと、【本文】と【参考】を読んで、これからの自分たちの在り方について大宮開成中学校の生徒が話し合いました。
次の発言の中で、筆者の主張と明らかに異なる発言を一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 大場さん 「【本文】で筆者は、私たち人間が近代的価値基準に基づいて作られた制度の中で暮らしているから、環境問題が発生したと言っていたね。」

イ 宮沢さん 「うん。さらに【参考】では、人間が自分のことを特別な存在と考えてしまったことにも原因があると訴えているよ。」

ウ 開藤さん 「そうだね、自然の中には人間以外にもいろいろな存在がいるのに。ホテルのような絶滅危惧種が再び繁殖できる活動が必要だね。」

エ 成田さん 「開藤さんの優しさは理解できるな。でも、特定の生物だけを助けるのではなく、その他のあらゆる生物を含めた全
体の多様性が生み出される努力の仕方が大事なんじゃないかな。」

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学二年生の室井さつきと小山内理子は北海道沢北町のスキージャンプのクラブチームに所属している。さつきは小学五年生の時に沢北町に引っ越してきて、すぐにスキージャンプを始めたが、その時にはすでに理子は町でも有名な選手だった。しかし、理子は中学生になってから徐々に調子を落としていき、クラブチームの練習にも来なくなってしまった。以下は、さつきが理子を家まで送っている場面である。

「どうしても理子に戻ってきてほしくて、お父さんとお母さんに相談しちゃったの。怒ってる？」

おそろおそろ尋ねると、「ちょっと目をつぶってくれる？」と言われた。そのとおりにすると、眉間を軽くはじかれた。

「このデコピンでちやらね」理子はくすくす笑った。「そうだね、圭介だったら怒るかも。要らないおせっかいはするな、そういうところがわからないから鈍感なんだ、とか」

「そういえば私、理子の家に行くとき、圭介にすごく呆れられた。ジュニアの合宿前から理子は悩んでいたのに、一番近くにいて気づかないなんて鈍い、みたいな」

「そうだね……圭介みたいにイライラする人もいないけれど、私はさつきのそういうところ、嫌いじゃないよ。私がこんなことで悩んでいるの、本当は誰にも知られなくなかったから。どうにもならなくなるまでは、さつきがわりと普段どおりで良かった」

理子は素直だった。「私ね。おじさんおばさんと話して、お母さんとも話して、ジャンプを始めたころのことを、思い出せた」
軽トラックが対向車線をかけぬけていく。

「そのころの理子、見たかったな」

本心を打ち明けると、理子は肩を竦めてにこっとした。「どうして？」

「かわいかったんじゃないかって」

理子は面食らった表情をしてから、今度は声を出して笑った。

「同じだったと思うよ、少年団にいるその年頃の子たちと」

「そうかあ。じゃあ、やっぱり楽しかったんだね」

「うん、そうだね」

「理子のお母さん、言ってた。私が入団した日、すごく嬉しそうに帰ってきたって……それを聞いて私も、飛んじやいそうに嬉しかった」

「……うん。実際、そうだったもの」

刈り取りを終えた小麦畑には、点々と巨大なロールケーキみたいな麦の束がある。

「さつきが入ってくれて、嬉しかった。怖がっているのに背中を押したのは、ちょっと悪かったかなって思ったけど、すぐに楽しかったって言ってくれて、本当に……。その日のうちに何度も飛んでいるのを見て、この子と一緒に飛べたら楽しいだろうなって、心から思った。でも」

ごめんねと、一言前置きをして、理子は静かに言った。

「さつきを誘わなければ良かったって思ったことも、あるんだ」

理子の涼しげな目がまっすぐにさつきに突き刺さってくる。

「さつきがあまりにも楽々と飛んで、どんどんうまく、強くなっていくから。いつか追い抜かされるって、焦って、怖くて。負けるのが、怖くて」

さつきさえ誘わなければ、こんな思いをしなくてすんだのに——そう後悔してしまうこともあったのだと、理子は告げた。

「実際、もう負けちゃったし」

一瞬だけ逸らした理子の眼差しは、かすかな悲しみの色を帯びていた。

「でもね」理子はまた視線を戻した。「それでも私、さつきのジャンプ、好きだよ」

「理子……」

「ジャンプって、スタートから接地まで神経をいっぱい使って、ほんの何秒かの間にたくさんのことをしなくちゃいけないのに、さつきはすごく自然にそれをやっているみたいで、まるで、風を友達にして運んでもらっているように見えるの。空中姿勢も私よりいいし」

①
すごく自由な姿だと、理子は唇をほころばせた。

「だから、大好き」

さつきは理子の、鞆かばんを持っていない空いている手をきゅっと握った。

「私も理子のジャンプ、好きだよ。きれいで……本当にきれいで。最初からずっとそう思ってた。吉村杯のテストジャンプのときから」

「ありがとう」

「また、見たいの。一緒に飛びたい」

風になびく髪の毛をそっと押さえた理子に、さつきは訴える。「私だってわかる。六年生の夏、理子が私のことをお父さんに褒めてくれたように、私は理子のすごさがわかる。誰よりわかる。サマージャンプでは、私は理子より確かに飛んだけど、でも理子に勝ったとは思ってない」

「どうして？」

②
「だって、足を骨折しているボルトに勝ったって、誰も私のほうが足が速いなんて思わないでしょ？」

理子は苦笑した。「なにそれ？」

※2
「斉藤さんだって、体型変化で不調になるとしても、それは一時的なものって言ったんだよね？ だったら絶対また飛べるよ」

「絶対なんてことはないよ。もしかしたらこのままかもしれない。誰も保証も約束もしてくれない」

「約束がなかったら、だめなの？」

さつきは立ち止まった。さつきに手を握られている理子も、足を止める。

「一番最初にジャンプしたときは、なんの約束もなかったでしょ？ 理子は誰かに、あなたはすごい選手になる、ずっと勝ち続ける、将来はオリンピック選手になるって約束されたから、ジャンプを始めたわけじゃないよね？」

③
理子に伝えたいことが心の中でいっぱいになって、さつきはどういう言葉でそれらを表現していいのかわからない。だからせめてとばかりに、握る手に力を込める。

「理子も最初飛べなくて、永井コーチに背中押されたんだよね。それからどうしてジャンプ続けようって思ったの？」

痛いと言われるかもしれないなかったけれど、さつきは握る力を緩められなかった。

「ただ単純に好きになったからじゃないの？ 楽しかったからじゃないの？ 私はそうだったよ。言ったよね、理子のお母さんの言葉。私が入団した日、理子は嬉しそうに帰ってきたって」

「さつき、聞いた」

「理子のお母さん、まるで、入団したばかりのときに戻ったみたいだったって、言ったんだよ」

I 町中へ向かうバスが、二人を追いかけていく。

「勝つのも嬉しいけど、それよりもなによりも、私はジャンプが好きで、理子と一緒に飛ぶのが楽しいから飛んでるよ」

「さつき……」

「負けるのって嫌なことだっていうのはわかるよ。理子の本当の悔しさとか、辛さとか、そういうのはなにからなにまでわかってないかもしれないけど、いい気分じゃないことくらいはわかる。でも、それは全部を消しちゃうものなのかな。楽しさや嬉しさも全部消えちゃうの？」

低い山際に落ちるぎりぎり手前の夕日が、理子の顔を横から照らして、その瞳の色を薄く透けさせる。

「私、もう一度理子と飛びたい。理子だって心のどこかでは、このままやめたくないって思っているよね？ お母さんから聞いたの。理子、

昨日お母さんが勧めたお菓子を食べなかったって。もしやめる気なら、体重とか体型とか、もう気にする必要ないもん。違う？」

理子は微笑んだ。「違うないよ」

「私、理子がいると強くなれる気がするんだ。もっと飛べる気がする。そして、理子がお父さんに言ってくれたことを証明したい。それから……ちゃんと、本当に、理子に勝ちたい。迷っている途中の理子じゃなくて、本当の理子に勝ちたい」

理子は力のある眼差しで、きちんとさつきを見返している。

さつきは思い切って、一番重要な問いを投げかけた。

「理子。」

A

理子は首を横に振った。

「ううん、大好きだよ」

はつきりと、力強く、理子は断じた。「大丈夫。私、もう答えは出してるの。決めたからお礼にも来たんだよ」
やめない。斉藤選手を見返す。

理子の手がさつきの手をぎゅっと握り返してきた。

II 歩いて帰るはずの道のりの半分くらいで、陽はすっかり落ちて、あたりが暗くなってしまった。

歩けないこともないけれど、停留所と待合小屋を見つけて、そこでバスを待つことにする。理子は鞆の中から財布を取り出し、小銭を確認した。

明日から練習に行くと、理子は言った。

「うん、うん。一緒に行こう」

(今までみたいに)

「あのね、おじさんとおばさんは私の『弱点』のヒントをくれたの」

「じゃあ、『弱点』がもしかしてわかった？」

確認するさつきに、理子はこっくりと首を縦に振った。

「自慢に聞こえるかもしれないけれど、私、この夏みたいに負けたことってなかった。そうなの、ジャンプを始めてすぐにうまく飛べるようになって、それからなにつ、つまりかずに来た——ちょうど今のさつきと同じ。おじさんとおばさんに言われて順を追って振り返ってみて、これかな、って思った」

斉藤選手が『弱点』を指摘したのは、まだ理子が勝ち続けていた冬のシーズンだった。

「もしかして、負ける経験をしていないことがそうかもしれない……ううん、それだけじゃなくて」

理子は自分自身に言い聞かせるような口ぶりだった。

「負けて、スランプの時期を過ごして、辛い思いをして、なおかつそれを乗り越える、そんな経験のことを、斉藤さんは言ってたのかもしれない。もちろん、これが本当に正解かどうかはわからないけれど」

理子は待合小屋の中のベンチに腰かけながら、その場にさつきしかいないのに、満座の聴衆を前にしているかのように、きりと背を伸ばした。

B

「は、絶対マイナスにならないと思うの。たとえば、最終的に報われなかったとしても」

その言葉は、とてもスムーズにさつきの胸の内に落ちた。

（ああ、そうだ。きっとそのとおりだ）

そして、さつきの頭に今よりも幼い理子の声がよみがえる。

（あれと同じだ）

「理子は正しいよ」

さつきは心をこめて告げた。

「だって、理子自身が最初に言ってたでしょ？」

なにを？ という表情をした理子に、今度はさつきからあの言葉を返す。

「『向かい風は、大きく飛ぶためのチャンスなんだよ』」

（乾ルカ『向かい風で飛べ！』による）

※1 圭介……………さつきと理子の友人。以前二人と同じクラブチームに所属していた。

※2 斉藤さん……………さつきと理子のライバル。二人とは別のクラブチームに所属している。あとの「斉藤選手」も同一人物。

問一 ―― 部「面食らった」の本文中での意味として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 予想外の回答に衝撃を受け、混乱した

イ 思ってもいなかった答えに驚き、とまどった

ウ 想像していなかった返事に困惑し、焦った

エ 突然の発言に動揺し、困り果てた

問二 ―― 部①「理子は唇をほころばせた」とありますが、このときの理子の心情を次の文の

に合うように、

Aは二十字以内、Bは十五字以内で答えなさい。

A（二十字以内）

けれども、

B（十五字以内）

と感じている。

問三

——部②「足を骨折しているボルトに勝ったって、誰も私のほうが足が速いなんて思わないでしょ？」という発言について大宮開成中学校の生徒が話し合いました。ア～オの□に当てはまることばを、それぞれ本文中からぬき出しなさい。

大場さん このボルトって、オリンピックで三大会連続金メダルをとったジャマイカの陸上競技の短距離選手のことだね？

宮沢さん そうだね！ たしかに、そのボルト選手が骨折をしている状態で競走をして、勝ったとしても誰も自分の方が足が速いとは思わないよね。

開藤さん そうだね。つまり、いま理子は□□□□□□□□(七字)になっているから、そんなスランプの状態の理

子より良い記録を出しても、さつきは□□□□□□□□(六字)とは思えないということだね。

成田さん さつきは、□□□□□□□□(六字)を誰よりもよく知っているからこそ、□□□□□□□□(七字)

で、なおかつ□□□□□□□□(七字)の理子ではなくて、本当の理子に勝ちたいと思っているんだね。

大場さん そうだね。さつきにとって理子は、よき仲間であり、ライバルでもあるから、さつきは理子がいると、もっと遠くに飛

べるような気持ちになるし、□□□□□□□□(五字)気がするんだよね。

問四

——部③「握る手に力を込める」とありますが、なぜさつきは手に力を込めたのですか。その理由として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 斉藤さんに勝つまではスキージャンプを続けてほしいという自分の気持ちを、手を強く握ることで理子に分かってほしいと思っ

たから。

イ 手を強く握ることで、自分の質問にきちんと答えてほしいという強い思いを理子に分かってもらいたいと思ったから。

ウ 自分がこれから理子に伝えようと思っていることが間違っていないということを、手に力を込めることで自分自身に言い聞かせ

たかったから。

問五 波線部Ⅰ「町中へ向かうバスが、二人を追いこしていく」、Ⅱ「歩いて帰るはずの道のりの半分くらいで、陽はすっかり落ちて、あたりが暗くなってしまった」が表現していることとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア Ⅰは「さつきと理子は自分たちを追いこしていくバスに気づかないほど話に夢中になっていたということ」、Ⅱは「さつきと理子はお互いの気持ちをきちんと確かめ合うためにゆっくりと話をしていたということ」を表現している。

イ Ⅰは「さつきと理子はゆっくりと時間をかけて歩きながら話をしていたということ」、Ⅱは「さつきと理子は長い時間をかけて話し合ったことで気持ちが通じ合ったということ」を表現している。

ウ Ⅰは「さつきと理子はゆっくりと時間をかけながらお互いに自分の気持ちを話していたということ」、Ⅱは「さつきと理子は時間を忘れるくらい話に夢中になっていたということ」を表現している。

エ Ⅰは「さつきと理子は何台ものバスに追い抜かされてしまうほどゆっくりと歩きながら話をしていたということ」、Ⅱは「さつきは長い時間をかけてじっくり話をしたことで理子に自分の思いを伝えきることができたということ」を表現している。

問六

A	B
---	---

に当てはまるものとして適当なものを、それぞれ次のア～エの中から一つずつ選んで、記号で答えなさい。

ア 自分のこと、嫌い？

イ 自分のジャンプ、嫌い？

ウ 私のこと、嫌い？

エ ジャンプ、嫌い？

B

ア 負けて、辛い思いをしても、それを決して周りに見せずに努力し、自分自身に打ち勝つ経験

イ 親友に負けて、悔しい思いをして、それでも涙を流さずに、最後まで練習を続ける経験

ウ 負けを知って、それでも諦めずに、投げ出さずに練習を続けて、苦しい時間を耐える経験

エ 負けて、挫折を味わっても、くじけずに誰よりも練習をして、一度負けた相手に勝つ経験

問七 — 部④「その場にさつきしかいないのに、満座の聴衆を前にしているかのように、きりりと背を伸ばした」とありますが、このとくに理子がもっている覚悟を、初めてさつきに行動で示した一文を——部④より前の本文から二十五字以内で見つけ、最初と最後の五字をぬき出さない。ただし、句読点は含まない。

問八 本文の表現の説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

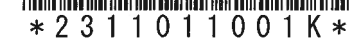
ア 「……」が会話文中に用いられることで、さつきと理子がお互いに言葉を選びながら会話をしているということが表現されている。

イ さつきと理子の短い会話がテンポよく繰り返されることで、二人の関係性が徐々によくなっている様子が描かれている。

ウ さつきと理子それぞれの視点から物語が語られることで、二人の感情の変化が読者に伝わりやすくなっている。

エ 後半になってさつきの心の内を表す（ ）が用いられることで、言葉を発しなくてもさつきの気持ちが理子に伝わるようになっていたということが表現されている。

問題は以上です。



第一回入試

[illegible]